

宣教的な地方教会形成の一試論

河野 勇 一

序

近年の教会論に於て、教会の働きとしての宣教が強調されるようになった。一つは、エキュメニカル運動の流れの中で「教会は、世のための使命に生きているときにのみ教会である」ことの強調である。教会は自己目的化してはならない。教会は、神のこの世に対する働きの機関としてこの世に仕えるべく遣わされているのである^①。この運動が福音主義とは異なった宣教観を持つことは周知の通りであるが、世にあって使命（ミッション）を遂行することが教会の生命線であると主張した点は、正しいと言わねばならない。もう一つは福音主義の中から起こった教会成長運動である。この運動は、世界、特に第三世界の人口爆発や民族主義の勃興などによって福音を聞いたことのない人々が急増していることに危機感を持ち、彼らに福音を伝える教会の宣教が最優先されるべきであると主張した。そのために有効な宣教（伝道）は、単に福音を告げ知らせることも、人々を回心に導くことでも、さらには彼らを教会の中に加入させることでも十分ではない。宣教は、教会に加入した信徒を弟子化し、彼らを再び世に派遣して宣教を拡大す

ることによって、教会が繁殖的に成長することをゴールとすべきであると主張した。これは、宣教の機関(agency)であると共に目標(goal)としての教会を強調している。^⑥これらの二つの正反対とも言えるような宣教論、教会論が共通して「教会の使命としての宣教」を強調していることは興味深い。

これらの運動の神学的主張は、開拓伝道や教会形成、さらには伝道の一層の拡大に腐心している最前線の伝道牧会者に、有形無形の影響を与えていると思われる。名古屋で開拓伝道にたずさわり、この時代と地域にあって聖書的な教会を建てあげてゆきたいと願っている筆者にとって、健全な神学的基盤を持ち、それでいて実地的な「教会形成論」(敢えて教会成長論と呼ばない)が検討されることの必要を感じるものである。本論は、その様な意識のもとで、先ず教会の使命としての宣教の概念を整理し、つづいて宣教的な教会形成の理論的モデルを提示するものである。その一つは、教会の宣教活動にとって必要な視野と分脈をわきまえたうえで、経時的観点からの「教会のライフ・サイクル論」であり、もう一つは、教会の本質を堅持しながら現代社会にふさわしい教会像を探る形態的観点からの分析と類型化である。

一、この世にある教会の使命(ミッション)

この世における教会の使命は何か？ それは古くて新しい問題であるが、教会はそれ自身で使命を持つのではない、この世における神ご自身の使命(Missio Dei)を担うものとして神から選ばれ、派遣されていることを確認しておく必要がある。しかし教会の成立事情から考えて、この世に遣わされているところの使命を考える前にまず神から選ばれてこの世から呼び出されたものとしての教会の使命を考えるべきである。神の民、イスラエルは真の神を礼拝

さべくエジプトから呼び出された民であったように、教会はこの世から呼び出された新しい礼拝共同体(エクレーシア)なのである。^⑦それならば教会の使命としてまず第一には、神を礼拝すること(対神的次元)をあげるべきであろう。そしてその次に、教会が遣わされているこの世において果たさなければならない使命(対世界的次元)を考えるに至る。(ディアスポラとしての教会)そしてこれらの二つの使命は、それらを良く果たしうるように自らを整え、訓練し、成長させ、刷新し続けるところの対自的使命(コイノニアとしての教会)と深い関係を持つ。キリストの体である教会が、その頭であるキリストの高さにまで成長する使命、命に満ちたからだ(有機体)として機能し続けるようにする使命である。では、教会のこの世に対する教会の使命は何かと問うとき、従来の福音主義教会は、それは福音宣教であると答えるのに急であった。しかし周知のごとく、ローザンヌ誓約では、伝道とともに社会的責任が取り上げられるに至った。^⑧また、M・エリクソンは目下の米国における最新の福音主義組織神学教科書とも言える「クリスチャンの神学」^⑨において、伝道、教育、礼拝と共に社会的責任を教会の機能として取り上げている。このような最近の動向は、キリストの使命を継承していくべくこの世に派遣された使徒的教会の使命を、より全体的(ホリスティック)に表すようになったとして評価されるであろう。

しかし、主イエスのこの世における使命・働きは何であったかというところから問い直してみると、カルヴァンの言った「キリストが何のために御父からつかわれたか、何をわれわれにもたらしたかを知るために、とくに三つのことがかれのうちに見られなければならない。すなわち、預言者職、王職、祭司職である。」^⑩が、神学的に最も妥当な表現ではないかと思う。まことに、キリストは旧約における、聖なる油をもって油そそがれた三つの務めを統合されたばかりでなく、陰に対する本体のように完全に啓示されたのであった。であるなら、主イエスの使命を継承し、この世に遣わされている使徒的教会は、預言者的、王的であると同時に祭司的務めをキリストの体なる共同体として

負っているといえる^⑧。教会の預言者的務めは、神の言葉を語り伝える福音宣教（プロクラメイション）と最も関係が深いと言えよう。弟子たちに対するイエス・キリストの大宣教命令「全世界に出ていき、全ての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ一六・一五）は、教会に対する命令であり、教会は、この「和解の福音を委ねられた」神の唯一の機関である（二コリント五・一九）。では王的務めとは何か。ここで私達は、聖書において、とりわけ主イエスにおいての王のイメージは、霊的な神の国を力をもって支配する主であるとともに、愛をもって徹底的に仕える、しもべ、でもあることを思い起こす必要がある。それは、この世のただ中で神の国の義を押し広めていく実践的な奉仕（ディアコニア）にはかならない。たとえば「キリスト者の労働者は、この世的賞賛や報いのためではなく、「主に仕えるように」自分の働きを行うのである。（エペソ六・五―七等参照）この様に日常世間的な仕事や苦勞の中でも、耐え忍んで仕えることが、神によみせられること、なのである（一ペテロ二・二十）^⑨。」最後の祭司的務めについても、教会に混乱がなかったわけではない。ローマ・カトリック教会における旧約に逆戻りするような祭司階級の存在が聖書的ではないと指摘し、「万人祭司」を高唱してきたプロテスタントにおいては、今度はそれを余りにも神との個人的な関係に理解してしまい、この世に対する教会の務めとして受け取ることが少なかつたように思える。教会は、不義に満ちた世界に神の怒りによる裁きが下らないように、また不信の世界が神の愛に應えて立ち帰るように、神の前にとりなして祈る務めを共同体として負わされていると言えよう。

とはいえ教会の社会的責任はこれら王（しもべ）的務めと祭司的務めの両方に相当し、伝道は預言者的務めの遂行であると平行的に考える通説は便利ではあるが単純過ぎるのではなからうか。現に、預言は社会的発言を含み、王的祭司的務めもただ単なる奉仕的務め（ディアコニア）だけでなく証し（マルチュリア）の働きでもある。結局、これら預言者、王、祭司的務めの全てはキリストの中に、それ故にキリストの福音（ユアンゲリオン）の中に、そしてさらには福音伝道（ユアンゲリゼタイ）の中に一つの全体的使命（ミッション）として統合されていると考えるべきである。そこで生じる問いは、この広義の伝道（宣教）と狭義の伝道との関係、また狭義の伝道と社会的責任の関係がどのようになるのかということである。ここでもローザンヌ誓約を注意深く読む必要がある。「伝道それ自体は、あくまでも、人々が一人一人個人的にキリストのもとに来て、神との和解を受けるように説得する目的をもって、歴史的、聖書的キリストを救い主また主として告知することである^⑩。」しかし「私たちは、父なる神がキリストを遣わされたように、キリストにあがなわれたご自身の民をこの世界に遣わされることを、また、その派遣は、主の場合と同じように、深いそして多大の犠牲を余儀なくするところの、この世界への浸透を要求するものであることを確認する。私たちは、教會的なゲットーからぬけ出て、未信者の世界の中に充満していく必要がある。犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである。世界伝道は、全教会が、全世界に、福音の全体をもたらし、ことを要求する。」^⑪ここでは伝道における個人的救いの中心性、或は優先性が確認されている。一方の社会的責任はけっしてないがしろにされているのではないが、教会の全体的使命＝宣教の中に含まれながらも狭義の伝道という核心の前後、或は周辺に一步退いているといえよう。狭義の伝道と社会的責任は、むしろ一つの使命（広義の伝道＝宣教）の二つの次元（個人的次元と社会的次元或は、魂的次元と体的次元）である。即ち、その教会の使命の中心を占めるのは伝道（狭義）であり、まず個人にキリストの救いをもたらすことである。しかし、教会の伝道（宣教）活動はその次元のみに留まっているはずはなく、この世界での奉仕などの証や責任ある社会的活動をも含むものである。実際に、社会生活を通しての証や社会奉仕は、一方ではとりなしの祈りと共に伝道に不可欠な予備伝道の位置を占めているし（かといって決して単なる伝道のための手段と考えるはならない）、他方では、キリストを信じた人々がその生活に於て結ぶところの伝道の実であると位置づけられるのである^⑫。

このように、宣教の使命を与えられている教会は狭義の伝道を何よりも優先してよい。いやそうしなければならぬ。ならば、教会を形成する業が自己拡張的だとの非難の声を耳にしてみよう。たえてはならず、教会を積極的に建設、形成していかねければならぬ。しかし反面、教会形成の業がいつも健全になされてきたわけではないのも事実であることも忘れてはならない。次においては、健全な宣教の使命に満ちた教会の形成という課題について実際的に考えてみたい。

一、宣教的教会の形成とは

前述した教会成長運動は、教会の数量的成長を非常に重要視していることは周知のことである。それは、一部の批判者が言うように教会の質を無視しているところか、教会の質的成長は必ずその数量的成長をもたらさずにはないといと強く確信しているのである。確かにそうであろう。しかし、どの様な時代と状況においても（特に短期間においては）必ずそうなるとは言いきれないことも確かであろう。また、数量的に成長しているキリストの名を持つ教会が例外なく質的にも良い教会であるというならば、それも単純過ぎるであろう。それならば、真に宣教的な教会の形成は、具体的に何を指すべきであろうか。「数量的成長」が一種の脅迫観念にさえなりかねない中で、この点を整理しておくことは、伝道牧会者にとって重要なことと思われる。

教会成長と言うとき、そこには前述した教会の使命と関連している四つの側面があることを記憶しておくことは有意義である。第一は、質的（霊的）成長で、礼拝の豊かさ、教理的確信、生活の聖さ等における成長である。第二は組織的（有機的）成長で、教会が単なる信者の集合体ではなく、キリストのからだなる有機体として結合していくことである。具体的には、リーダーシップの形成、信徒の賜物の発見と活用、ヴィジョンの一致などである。第三の社会的（受肉の）成長は、前述した伝道の実として結ぶべき社会的責任を教会がどれほど果しているかの面である。そして第四として数量的（宣教的）成長がある。この事を確認した上で、教会の数量的（宣教的）成長について、更に検討を加えてみたい。

A 世界宣教の視野の堅持

教会成長という言葉は、殆ど一地方教会あるいは教団レベルでの数量的成長という意味で使われている。しかし、教会成長運動は、元はといえば、教会に与えられた世界宣教の課題をいかに果たすかという問題意識から生まれたものであって、その様な範囲で留まるべき物ではない。ところが残念なことには、その世界宣教の視野を失った教会成長が流布しているのが現実ではなからうか。その様な中からは、地方教会の会員数なり礼拝出席者数を五十人から百人、百人から二百人というように増やすことに関心が集中し、教会エゴイズムや教会成功話が生まれ安くなるし、現にその様な弊害も多々耳にするところである。一つの小さな地方教会の形成においても、それが普遍教会全体の世界宣教の営みの一環であり、その営みに今まで以上に貢献しうる教会となるという意味での成長を目指さなければならぬ。教会の数量的（宣教的）成長は、宣教の結果であると共に世界宣教への責任分担能力と意識の成長である。

この事を、地方教会において具体的に考えさせてくれるのが、R・ウインターが提唱し、G・ハンターが更に前進させた「越文化の程度による伝道の七つの類型」の研究である。^④それは、次のように要約できる。

E₀ … 教会の内部にいるが、生きた信仰を持っていない人への伝道（クリスチャン・ホームの子弟や名目的クリスチャン）

以下からは教会の外部の人への伝道

E₁-A :: 教会員と同文化で、親交のある人への伝道（未信の家族や友人）

E₁-B :: 教会員と同文化であるが、親交のない人への伝道（普通の地域伝道）

E₁-C :: 教会員と同文化であるが、やや異なった生活様式を持つ人への伝道（サラリーマン中心の教会の商業者への伝道や転入者中心の教会の土着の人々への伝道など）

E₁-D :: 教会員と同文化であるが、異なった文化的自意識を持っている人への伝道（アメリカの白人系教会の日系アメリカ人への伝道などだが、わが国では、どの様なことを指すのか意見の分かれるところ）

さらに、

E₂ .. 同じ大陸に属しながら、異なった国や文化の中にいる人への伝道（在留外国人への伝道など）

E₃ .. 異なった大陸、異なった文化の中にいる人への伝道（いわゆる海外宣教）

この分析は、地方教会の伝道を考えるに際して、私たちの視野を広げてくれる。と言うのは、地方教会の伝道においては、このような文化的相違を意識的に考慮してこなかったため、その文化的障壁を越える拡大伝道の視点や戦略なるものが生まれようがなかったのではなからうかと思ふからである。そしてそのことが、地方教会にとっての大宣教命令「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としないさい。」（マタイ二八・二十）が伝道への精神論的な刺激あるいは海外宣教のアピールに留まって、日常の教会（伝道）活動を世界宣教への参加意識に結びつけにくかった一つの現実的な原因ではなかったらうか。ちなみに、この様な文化的分析とその障壁を越えていく宣教観の一つの根拠ともなっているのが、この同じマタイ二八・二十への新しい洞察であることは、記憶しておいてよい。それは、「あらゆる国の人々」（パンタ・タ・エスネー）のエスネーとは、政治的な国家のことではなく、民族・文化・言語・

社会的階層によるグループ（英語のエスニック）であるということである。わが国における世界宣教の視野を持った地方教会の伝道とは、単に海外宣教師を派遣したり、支援すること（E₃伝道）だけではなく、それ自身は非常に大切なことで、全ての教会がもっと力をいれるべきであるが、それに加えて日常的、かつ身近な伝道活動の中においても、E₀からE₁-Bの範囲を拡大して、E₁-CからE₂伝道をも行う戦略を持つことではなからうか。そうすれば、同文化、同生活様式の人々を多く集める教会の評価だけでなく、越文化伝道への努力と実績を評価する視点が生まれてくるであろう。結局、宣教的教会成長とは、数量的成長と共に、この越文化的伝道能力の成長と言える。

B 教会史的分脈の検討―教会のライフ・サイクル論―

教会成長運動はまた、あたかも無限に継続的な教会成長が可能であるかのような印象を与え、それが非現実的な楽観論を感じさせることは否定できない。しかし、教会の歴史を振り返ってみれば自明のことであるが、教会は成長、停滞、衰退、そして再生を繰り返してきたのである。新約中の教会ばかりでなく、教会史上の教会のほとんどが、今は無いか、その建物を残すだけとなっている。この厳粛な事実を踏まえて、教会史的評価に耐えうる地方教会形成論が必要と思われる。

教会がキリストのからだなる霊的生命体であるゆえ、生命的成長の概念をこれに適用することは当を得ているであろう。しかしどの様な生物個体も無限に成長し続けるものなど癌細胞を除いては有り得ない。健全な生命体は、例外なく、成長、子孫誕生、成熟、衰退ということをライフ・サイクルを持っているのである。ゆえに、特に地方教会の意味で教会成長を考える際には、成長ということを生きたライフ・サイクルの一部として限界づけつつ考察すべきと思ふ。それゆえ、ここでは、一つの地方教会の誕生からの過程をいくつかの時期に分類して、モデル的な（それは模範的という意

味ではなく、平均的と思われる一例の意味での「教会のライフ・サイクル」を試作してみたい。

1、開拓期……通常、教団や教会の支援を受けながら、教会の核を形成する。無からスタートするこの時期にあっては、開拓者のヴィジョンや賜物によって、かなり強い性格づけが為される。同時に、そのとき最も受容的だった文化的グループによっても色づけられる。ある教会は、青少年を、他の教会は、若年夫婦を、また他の教会は、英語に興味を持つ人々によって等である。それは、成熟した教会としては望ましいことではないが、この段階においては、かなり文化的に差異のある複数のグループを同時に形成するのは、一人の開拓者にとっては、能力的、物理的にかなりむずかしいと思われる。ここではむしろ、群れが一つの文化的色合いを持つことを承知の上で、恐れることなく最も受容的と思われる人々を絞って、集中的に伝道するのが望ましいであろう。

2、自立期……開拓から数年経って教員が二十から三十名ほどになると、組織的、経済的に自立した教会としての歩み始める。この時期に最も留意すべきことは、群れが教会となるために質的(靈的)に、また組織的(有機的)に成長することであろう。教会としての宣言と共に、普通は役員会が設けられる。しかしこの時期では、教会の役員としてふさわしい靈的資質を持った人材が育っていないことが多い。信仰歴の長い人がいる場合は、それは他教会からの転入者であり、それ故の問題も出ることがある。教員個人の靈的な成長が大きな課題である。またそれと同時に、キリストのからだとしての教会を理解して、各自がその肢体として結びついていることを認める教会アイデンティティーを築く必要がある。それらのために最も重要なことは、一筆者の個人的な経験では一牧師自身が、どのような教会を築き上げようとしているのか、教会のヴィジョンは何かなどの根本的な問いを自らに課して、その答えを確信を持って教員の前で表明できるまでになることではないだろうか。その意味で教会形成者の教会観が、問われる時期である。

3、一次成長期……この時期は、それまでの牧師の個人的力を中心とした伝道活動から、信徒の積極的な奉仕が用いられる伝道に転換がなされる時期である。わが国の場合、牧師一人の力では二十から三十人の牧会が限度だとよく聞かされてきたが、それはある程度当たっているのではないだろうか。この壁を破って、数量的に成長するには、未信者と積極的に接触し、彼らのために祈り、そして教会に迎えられた彼らの牧会的世話ができる信徒が育たなければならない。教会の受け皿が大きくならなければ、いくら伝道集会をやり、多くの未信者を呼び集めても、教会に繋がらないで、脱落させてしまう。その意味で、教員個人の、証や伝道、簡単な牧会のための訓練(弟子化)が、ここでも大切である。文化的には、この段階は、まだ当初の文化内での伝道(E₁-A、E₁-B伝道)で十分やっていけるし、またその方が、より早い成長を見ることができようであろう。

4、二次(拡大)成長期……教員数が五十人のレベルになってもなお一つの文化内のみでの伝道に身を費やしているならば、怠慢のそしりを免れ得ない。私見では、せいぜい人口の一名がクリスチャンのわが国においては、ある地域内の、ある文化的グループの中で五十人を得たことは、一応の飽和状態に達しており、その中でそれ以上を得ようとするは、更に強力な伝道方法を必要とする。それは非常に大切なことではあるが、同時にこれまでとは違った文化(或は生活様式)の中にいる人への伝道を展開すべきなのがこの段階である。E₁-C、E₁-D伝道への拡大である。多くの教会で、地域集会や家庭集会を積極的に推進したり、礼拝を、時間的或は、場所的に複数化したりしているのにもその実践を見ることが出来る。しかし他方では、この段階で停滞している教会も非常に多く、拡大伝道に目覚める必要性を痛感する。また教会内においては、クリスチャン・ホームの子弟たちが塊となって多くなる時期でもあり、教会内での新しい世代への伝道(E₂伝道)に全教會的に取り組む必要のある時期でもある。もう一つ、ほとんどの教会が、この時点で会堂の物理的限界を持つように思われる。そのときの教会の対応は、それ以後の十年、二十年に大